水と共に生きる鹿児島の暮らし

志學館中等部　二年　大野　耕太郎

私たちの暮らしに欠かせない「水」は、飲み水としてだけでなく、農業や産業、さらには文化や心のよりどころとしても大切な存在である。私は鹿児島県で生まれ育ち、日々の生活の中で水のありがたさを実感している。この鹿児島という地は、水と深い関わりを持つ土地であり、その豊かな自然と人々の暮らしの中に、数えきれないほどの「水の恵み」が生きている。

鹿児島には、美しい湧水が各地に存在する。中でも川辺町の高田には、昔から湧き水が出る場所があり、今でも多くの人が水を汲みに訪れる。私の祖父はいつも水を汲みに高田を訪れていて、小さい頃から祖父が水を汲む姿をよく見かけた。「この水は昔から変わらん。冷たくておいしいよ」と言って、祖父は嬉しそうにペットボトルに水を入れていた。家に帰ると、その水を冷蔵庫で冷やしながら大切

20 × 20

に飲んでいて、その時の祖父の穏やかな表情と、湧き水の前で見せた真剣な様子は、今でも心に残っている。祖父にとってその水は、ただの飲み水ではなく、日々の暮らしを支える大切な存在だったのだと思う。

鹿児島の水は、こうした家庭での使用だけでなく、地域全体の文化や産業にも大きな役割を果たしている。たとえば、鹿児島の焼酎は全国的にも有名だが、そのおいしさの秘密のひとつが水にある。仕込みに使われる水は、島や伊佐など各地の清らかな地下水や湧き水で、軟水のため原料のさつまいもや米のうま味をしっかりと引き出してくれる。水が良いからこそ、焼酎の品質も保たれているのだ。

また、水は農業にも欠かせない。鹿児島は、温暖な気候と豊かな水に恵まれており、様々な温暖な気候と豊かな水に恵まれている。水路を通して田畑が広がっている。これから来る夏の風物詩でもある。祖父母の家の近くを流れる用水路の音を聞きながら、私はよく虫取り田んぼに引かれる水の音は、

りをしたり，カエルやカニを探したりして遊んだ。このように水は生活の中に自然と溶け込んでいて，意識しなくてもそばにある存在だった。しかし，水は恵みである一方で，時として恐ろしい災害をもたらすこともある。

その代表的な出来事が「ハチロク水害」だ。

平成五年八月六日，集中豪雨によって鹿児島県内各地で大規模な洪水や土砂災害が発生し，多くの命が奪われた。私はまだ生まれていなかったが，小学校で詳しくその被害について学び，祖母や母から当時の体験をたくさん聞いた。真剣に話すその姿から，水の恐ろしさと自然の力の前で人がいかに無力であるかを感じさせられた。

ハチロク水害をきっかけに，川の改修や防災施設の整備が進められ，地域の防災意識も大きく変わったという。現在では，避難情報の発信や，防災訓練，ハザードマップの備えなどが進み，住民一人ひとりが「自分の命は自分で守る」という自助の意識を持つように

なっている。水のある暮らしは豊かであると同時に、常に備えを怠ってはいけないのだ。

水は命の源であり、鹿児島の自然や文化の中心にある存在だ。高田の湧き水、田んぼを潤す水路、そして時に猛威をふるう豪雨。それらすべてが「水」の姿であり、私たちはその恵みと脅威の両方と向き合いながら生きている。この土地に生きる一人として、私はこれからも水の大切さを心に刻み、水とともにある暮らしを大事にしていきたいと思う。